

序. キリスト者の生活についての勧め

朝の礼拝ではパウロが記しましたテサロニケの信徒への手紙第一から御言葉に聞いています。この手紙は大きく二つに分けることができます。前半はこれまで学んできました1章から3章です。そして後半がこの4章から始まります。4章1節で「さて」と訳されている言葉は、「残りのことについては、最後に」という意味があります。パウロは今まで語ってきたことから話題を転換して、ここからは私たちキリスト者がどのように歩んでいくべきかについての勧めをしています。

1. 神に喜ばれる歩みをさらに豊かに

4章1節2節がその序論と言える部分です。

「さて、兄弟たち、主イエスに結ばれた者としてわたしたちは更に願ひ、また勧めます。あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを、わたしたちから学びました。そして、現にそのように歩んでいます。どうか、その歩みを今後も更に続けてください。わたしたちが主イエスによってどのように命令したか、あなたがたはよく知っているはずです。」

ここからわかるようにパウロが教会の人々に語り、思い起こさせようとしているのは、私たちキリスト者が「神に喜ばれるためにどのように歩むべきか」ということについてです。「歩む」とは「生活する、生きる」ということです。私たちが生きていく、歩んでいくのは、「神に喜ばれるため」なのです。私たちが礼拝の中で読んでいますウェストミンスター小教理問答問1では「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」と教えられています。これは私たちにとって大切な教えです。それと同時に、今日の御言葉から覚えたいことは、私たちの歩み、生活の目的は、神様に喜んでいただくことだ、ということです。私たちは神に喜んでいただけるように歩むべきであり、そのように歩まなければならないのです。

私たちは、かつては罪の奴隷として罪を犯し、神に喜ばれない歩みをしていました。また今もそのように歩んでしまう弱さを持つ者です。しかし神様はそのような私たちを愛してくださり、一方的な愛と憐れみによって、私たちを救ってくださいました。主イエス・キリストの十字架の血によって私たちが贖ってくださいました。それゆえ、私たちは神様への感謝をもって、神様に喜ばれる歩み、生活をしていくべきなのです。

パウロはそのことについてテサロニケ教会にいる時から、既に教えていました。ですから「あなたがたは、神に喜ばれるためにどのように歩むべきかを、わたしたちから学びました」と言っているのです。さらに「(あなたがたは) 現にそのように歩んでいます」とも言っています。テサロニケ教会の人々は、パウロたちから学んだように、実際に神様に喜ばれる歩みをしていたのです。しかしパウロは、そこで留まるのではなく、「どうか、その歩みを今後も更に続けてください」と願ひ、勧めています。この言葉は「さらに豊かであるように」と訳することができます。あなたたがは今既に神に喜ばれる

歩みをしているけれども、その歩みをさらに豊かなものにしていくように。パウロはそのことを願い、勧め、励ましているのです。そしてこれは単にパウロの個人的な願いではありません。パウロは1節で「主イエスに結ばれた者としてわたしたちは更に願い、また勧めます」と言っています。パウロたちは、主イエスに結ばれて、主イエスのうちにいる者として、このことを願い、勧めている。それゆえこの勧めは、ただパウロ個人の願いや勧めではなく、主イエスご自身の願いと勧めでもあるのです。私たちはそのようなものとして、ここに語られる勧めを受け取っていくことが大切です。

パウロは2節でも「わたしたちが主イエスによってどのように命令したか、あなたがたはよく知っているはずですよ」と言っています。パウロたちがこれまでテサロニケ教会に与えてきた命令は、ただ自分の思いから出たものではなく、「主イエスによって、主イエスを通して」与えたものなのでした。それゆえ、そのパウロたちの命令は、主イエスご自身からのものであり、今日の私たちも従うべき権威ある主の命令であり、教えなのです。

2. 神の御心に従った聖なる生活 (4:3-8)

・神の御心はあなたがたの聖化

ではパウロは、どういうことを主イエスによってテサロニケ教会に命じたのでしょうか。神に喜ばれるために私たちはどのように歩めばよいのでしょうか。そのことについて、続く3節から語られていきます。

「実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです。」

神に喜ばれる歩みとは、神の御心に従って歩むことです。そして「神の御心」は、「あなたがたが聖なる者となること」と教えられているのです。

パウロは今日の個所の直前、3章13節で次のように祈っていました。

「そして、わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださるように、アーメン。」

そこでも「聖なる」という言葉が使われていました。そういう意味では今日の勧めは、その祈りとつながっています。ただし同じ「聖なる」と訳されている言葉ですが、若干意味の違いもあります。祈りの中で「聖なる、非のうちどころのない者」と訳されている言葉は、「聖さにおいて非のうちどころがない、責められるところがない」という意味です。そこでの「聖さ」とは、聖い状態、特に完全に聖められた状態を意味していました。一方、今日の個所で「あなたがたが聖なる者となること」と訳されている言葉は、「あなたがたの聖化」と訳すこともできる言葉であり、私たちが聖い者になっていくこと、聖化されていくこと、そのプロセス、過程を意味する言葉です。神様の御心は、私たちが聖くなっていくこと、聖化されていくことなのです。そのような神様の御心は、すでに旧約聖書において示されています。レビ記の20章26節。

「あなたたちはわたしのものとなり、聖なる者となりなさい。主なるわたしは聖なる者だからである。わたしはあなたたちをわたしのものとするため諸国の民から区別したのである。」

神様が聖なる者であられるがゆえに、その神様のものとされた私たちも「聖なる者となりなさい」と言われています。それが神様の御心、神様が私たちに望んでおられることなのです。

・みだらな行いを避ける

では具体的に、私たちが聖なる者となる、とはどういうことなのでしょう。そのことが3節から6節にかけて語られていきます。

「すなわち、みだらな行いを避け、おのおの汚れのない心と尊敬の念をもって妻と生活するように学ばねばならず、神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです。このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしてはいけません。」

ここで気づかされることは、ここで教えられている「聖なる生活」は、性的な事柄に関わるものだという事です。広い意味での「聖化」は、性的な事柄に限定されませんが、ここでパウロは特に性的な事柄に関して「聖く生きる」ことを教えているのです。

その背景には、テサロニケ教会が異教の性的に乱れた社会の中に生きていたということがあります。「みだらな行い」と訳されている言葉は、もともと男が売春婦と関係を持つことを意味しました。そこから広く「不道德な性関係」をも意味します。古代ギリシャ社会では、異教の神殿に「神殿娼婦」と呼ばれる人たちがいました。宗教的な儀式として神殿娼婦と関係を持つことがなされていました。また男は結婚していても愛人やめかけを持ち、性的な関係を持つことが普通になされていました。それが特に悪いこと、罪とは考えられず、日常的に行われていたのです。

テサロニケ教会の人々はそのような異教社会から真の神様に立ち帰った人たちでした。しかし依然としてそのような性的に乱れた社会の中に生きていたのであり、そこで行われている「みだらな行い」へと引っ張られ、誘惑される力も大きかったのだと思います。だからこそ、パウロは特に性的な事柄・振る舞いにおいて、「あなたがたが聖なる者となる」ことが神の御心であり、あなたがたは「みだらな行い」を避けるべきであると注意し、警告する必要があったのです。

私たちが生きている日本も、異教の性的に乱れた社会なのだと思います。芸能人の不倫がよく報道されますが、それはほんの一部であり、「みだらな行い、不道德な性関係」は日常的に、普通のこととして行われている。私たちもそのような社会に生きているのだと思います。ただ誤解してはならないのは、男女の性的な関係そのものが汚らわしいということではありません。それは結婚している者同士、夫婦の間で喜び楽しむべきものとして、神様から与えられている恵みであり祝福です。しかし真の神様を知らない異邦人は、結婚を神聖なものとして重んじることをせず、結婚関係の外で男女の性的な関係を持っている。それらは聖書の基準、神様の基準では、「みだらな行い」なのです。私たちキリスト者はそういったことを避けて、「聖なる者」となっていく必要があるのです。それが神様の私たちに対する御心だからです。

・自分の器（体）を情欲に任せるのではなく、聖く尊いものとして保つ

そして4節では「おのおの汚れのない心と尊敬の念をもって妻と生活するように学ばねばならず」と言われています。実はこの文は聖書によって翻訳が大きく異なっています。新改訳聖書（2017年）では4節は次のように訳されています。

「一人ひとりがわきまえて、自分の体を聖なる^{たっとい}尊いものとして保ち」

また 2018 年に発行された聖書協会共同訳でも

「おのおの気をつけて、自分の体を聖なるものとして尊く保ちなさい」となっています。

私たちが今用いている新共同訳の「おのおの汚れない心と尊敬の念をもって妻と生活するように学ばねばならず」とはだいぶ違っていることに気づかされます。

このような違いがどこから生じているかという点、原文（ギリシャ語）で用いられている「自分の器」という言葉をどのように解釈するかの違いなのです。新改訳や聖書協会共同訳は「自分の器」を「自分の体」と解釈し、そのように翻訳しています。一方、新共同訳では「自分の器」と「自分の妻」と解釈し、その上でだいぶ意識してこのような文章になっています。

原文を直訳すると「あなたがたそれぞれが自分の器を聖く、尊く保つ」となります。この「自分の器」を「自分の体」と解するのか、あるいは「自分の妻」と解するのかについては、古代から現代に至るまで議論があり、意見が分かれています。今回私なりに調べ、考えた結果、ここでの「自分の器」とは「自分の体」を指していると解釈するのが自然であり、妥当ではないかと思っています。後代のユダヤ教の文献では「器」を「妻」を指すものとして表現している文章があるようですが、パウロがそのように表現しているところはありません。また「自分の器」を「自分の妻」と解釈する根拠の一つとして、第一ペトロ 3 章 7 節が持ち出されることがあります。新改訳聖書（第三版）でお読みいたします。「同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。」

ここでは妻が「自分よりも弱い器」と呼ばれています。しかし注意すべきことは、ここで「妻」が「夫の器」とは言われていないということです。むしろ夫も妻も神様に造られた器であり、両者を比べた時、妻の方が「より弱い器（体）」である。夫のそのことをわきまえて、妻を配慮するよう教えられているのです。それゆえ、この個所を根拠に今日の個所における「自分の器」を「自分の妻」と解釈することはできません。また文脈からもここでパウロが「自分の妻」のことを話題にしているのは、不自然ではないかと思えます。パウロは「あなたがたそれぞれが」と言っているのに、「自分の妻」と解釈してしまうと、実際には妻を持っている夫にだけ当てはまる言葉になってしまいます。

一方、「自分の体」と解すれば、男女を含め、既婚未婚に関わらずすべての人に当てはまる教えとなり、よりふさわしいでしょう。またパウロは他の個所、例えば第二コリント 4:7 で「わたしたちは、このような宝を土の器に納めています」と、自分の体を「器」と呼んでいます。以上のことを考慮した結果、この 4 節の「自分の器」とは「自分の体」を指していると解釈するのがふさわしいと思えます。

パウロはここで、自分の体を聖なるもの、尊いものとして保つよう教えているのです。そして 5 節では「神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです」と言われます。真の神様を知らない異邦人は、情欲におぼれ、抑えられない性的欲望に身（体）を任せている。しかし、あなたがたはそうではなくて、自分の体を聖なる、尊いものとして大切にしてください。このようなパウロの教えは、第一コリント 6 章 18～20 節の言葉と響き合っています。

「みだらな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて体の外にあります。しかし、みだらな行いをする者は、自分の体に対して罪を犯しているのです。知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。」

私たちの体はもはや自分のものでなく、キリストの命という尊い代価を払って買い取られたもので

す。それゆえそれは尊い、高価なものです。さらに私たちの体には聖霊が宿ってくださっている聖なる神殿なのです。それゆえ私たちはみだらな行いによって自分の体を汚すべきではなく、むしろ聖いもの、尊いものとして保っていく必要があるのです。

・境界を踏み越え、兄弟から欺き取ってはならない

さらに6節では「このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしてはいけません」と言われています。「このようなこと」とは、これまで語られてきた「みだらな行い、性的な不品行」のことでしょう。そして「踏みつける」と訳されている言葉は、「境界を踏み越える、権利を侵害する」という意味があります。そして「欺く」と訳されている言葉は、「貪欲に取り込む、むさぼり取る、取ってはならないものまで無理に手を伸ばして取る、～から欺き取る」という意味があります。さらにこの言葉は、相手の男から妻を欺き取る、というように姦淫にも適用されました。ここで意味されているのもそのことでしょう。あなたがたはみだらな行い、姦淫によって、境界線を踏み越え、兄弟姉妹からその妻や夫を欺き取るようなことはしてはいけない、ということです。

そしてその理由として「わたしたちが以前にも告げ、また厳しく戒めておいたように、主はこれらすべてのことについて罰をお与えになるからです」と警告されています。不倫をする人は、ばれなければよいという思いが背後にあるのではないかと思います。不倫はだいたいばれるものだと思いますが、もしかしたら人をうまく欺き、ばれずに済むかもしれません。しかし、パウロが警告しているように、もし人にばれなかったとしても、「主はこれらすべてのことについて罰をお与えになる」、すなわち主がこれらすべてのことについて「報復者、復讐者」であられるのです。最後の審判において主から罰が下されるのです。私たちは主を畏れることによって、人を欺こうとするみだらな行いを避けなければなりません。

・聖なる生活へと召された神

そして7節

「神がわたしたちを招かれたのは、汚れた生き方ではなく、聖なる生活をさせるためです。」

神様は、私たちが御自分の民として、諸国民の中から召し出し、聖別してくださいました。その目的は、私たちが汚れた生き方をするためではなく、聖なる生活をするためです。私たちが聖化の中を歩んでいくためです。しかし私たちはなお自分の欲望や誘惑に負け、罪を犯し、自らを汚してしまうことがあります。そのような自分が嫌になることがあるかもしれません。しかし神様はそのような汚れた私たちが清め、赦すために、御自分の御子イエス・キリストを十字架にかけてくださったのです。それゆえ、私たちはたとえ罪を犯してしまったとしても、悔い改めるならば、主イエス・キリストの十字架のゆえに赦していただけるです。しかしだからと言って、私たちはこれからいくらでも汚れた生き方をしよよい、ということではありません。私たちが召してくださった神様の御心は私たちが聖なる生活をする事、私たちが清められつつ歩いていくことだからです。この神様が私たちが召してくださった目的を忘れてはなりません。

そして最後の8節では

「ですから、これらの警告を拒む者は、人を拒むのではなく、御自分の聖霊をあなたがたの内に与えてくださる神を拒むことになるのです。」

パウロがここまで語ってきたことを拒み、無視することは、ただ一人の人間パウロを拒むのではなく、神御自身を拒むことになる、と警告されています。その神は、「御自分の聖霊をあなたがたの内に与えてくださる神」と言われています。神様は私たちの汚れを清め、私たちが聖なる生活をしていくことができるようにと、御自分の聖なる霊を私たちに与えてくださっています。しかし、私たちがもし語られてきた警告を無視し、汚れた生き方をするならば、それは聖霊を私たちの内に与えてくださり、私たちが清めようとしてくださる神御自身を拒むことになるのです。

結論

私たちはそのようなことにならないよう気をつけたいと思います。聖霊はすでに私たちに与えられ、私たちの内に住んでくださっています。ですから私たちは情欲に身を任せて汚れた生き方をするのではなく、聖霊の導きに従って聖なる生活をし、聖化のうちに歩んでいきましょう。それが私たちを召してくださった神様の御心にかなうことであり、神様が喜ばれる歩みなのです。